

書 評

マリー・クレール・ロビク (監修)『ポール・ヴィダール・ド・ラ・ブラーシュの「フランス地理のタブロー」: 諸形態が織りなす迷路』

Marie-Claire Robic (sous la direction de):
Le Tableau de la géographie de la France
de Paul Vidal de la Blache. Dans le labyrinthe
des formes.

Paris. Comité des travaux historiques et
scientifiques, Ministère de l'Éducation Nationale.
Ministère de la Recherche. 2000, 301p.

ISBN: 2-7355-0419-0

20世紀初頭の1903年に出版された『フランス地理のタブロー』は、著書の少ないヴィダール・ド・ラ・ブラーシュにあって、『フランス東部』(1917年)とともにフランス地理学派の「古典」とされ、最近30年間においても新しい解説付きの新版がいくつか発行され、さまざまなかたちで論じられてきた。周知のように、これらふたつの著作はかなり対照的な性格をもっていて、動態的な都市経済・工業経済がつくりあげる結節地域に注目し、同時にアルサス・ロレーヌと関連してナショナリストの側面が強く出ている後者に対して、前者は歴史的に形成された地域 (région) とペイ (pays) のあいだの多様性と調和を重視し、したがって多くのページが農村あるいは伝統的生活様式の記述にあてられているとするのが「通説」であった。しかしこの「大師匠」没後の1960年代末までの半世紀は、地理学界においてのみでなく、フランスの知的世界全体において、彼は列聖され、その作品は名作集のものとして、賛美的かお手本にされるだけで、系統的かつ詳細な検討の対象となることはなかった。

ここでロビクの率いる「地理学の認識論と歴史」チームのこの新しい研究成果¹⁾をとりあげるのは、E.ラヴィッスの監修するフランス史のシリーズの一卷として出版されたヴィダール・ド・ラ・ブラーシュのこの著作が歴史地理学の古典として重要であることによるよりもむしろ、19世紀的な国民国家の統一という観点からではなく、地域間の交流を通じて形成された文化の物質的側面、すなわち景観に注目してフランスの個性を描

き出そうとしたこの著作こそが、フランスのナショナル・アイデンティティ形成に重要な歴史的役割を果たしたことによるものである。この点でヴィダールは、歴史学者のフェーブルやブローデルが賛辞によって彼をそこに閉じこめようとした静態的歴史観・非政治的な立場から実際にははみ出して、諸地域の交流性 (sociabilité) を動的に把握し、きわめて政治的にパリ・コミューン後の階級間の妥協と地域主義を主張したのであった。『タブロー』は1960年代までのフランス地理学派によって人文地理学の方法と地誌的記述の範例とされていたが、19世紀的政治地理学を克服して彼によって確立された人文地理学の観点は、フランス人にとってのいわば「記憶の場所」を具体的に提示することによって、ナショナル・アイデンティティの形成と相互浸透関係にあったのである。1871年後の国民国家を領域化するにあたって、ヴィダールが用いた「地表に刻まれた痕跡」というメタファーは、景観の解釈学、あるいはF.ド・ソシュールと同時進行的にかつ独立に編み出された記号論であったのであり、ヴィダールの記述に、B.アンダーソンが分析した集团的忘却にもとづく「想像の共同体」形成の事例が数多く見出されるのである。

ここで「タブロー」とは、19世紀に確立した知の経験主義的表現形式であり、概観的展望と分析的裁断を目的としていて、書誌学的に19世紀になると多くのタブローが著されたのを確認することができる。ヴィダール・ド・ラ・ブラーシュがその『タブロー』の最初の部分で「ここでわれわれは『フランスは人格である』というミシュレの言葉をすすんで繰り返そう」と述べているように、彼の作品は明らかにミシュレの『フランスのタブロー』(1833年)を念頭において書かれたものであった。ふたつの『タブロー』はしかしながら対照的な性格をもっている。ロマンティズムの伝統に身を置くミシュレが、国土を統一のある有機体として俯瞰することから、彼の『タブロー』の筆をおこしているのに対して、ヴィダールにとっての国土はまとまりのある六角形ではなく、まずは迷路状に諸形態が混在する地峡であり、そこに

古代以来の商人、旅行者、地理学者の観察をたどることにより、徐々に多様な部分を結びつけている交流の道筋と結節構造が見えてくるのである。ミシュレにとっては王朝国家の統一がまずあったのに対して、ヴィダールにとっては流通するモザイク (mosaïque distributionnelle) が重要であり、フランスがひとつの人格であるのは、そこに統一の意識があるからなのである。

ふたつの『タブロー』は、その構成においても対照的で、ミシュレのものが最後の部分でパリを中心とする集権国家の見事な開花に多くのページをさいているのに対して、ヴィダールの結論部はきわめて短く、そこではパリ集中・パリ集権体制に対して否定的な評価が下されている。

以下簡潔に章ごとに本書の内容を紹介すると、Jean-Louis Tissierによる第一章では、ヴィダール・ド・ラ・ブラーシュは、タブローの執筆を引き受けた (当初は『タブロー』という書名は考えられていなかった) 1888年以降15年間にわたりフランス国内を丹念に旅行してまわり、その経験がタブローの内容に強く反映していることを、ヴィダールの15年間の手帳 (carnet) の詳細な検討にもとづいて示している。Daniel Loiによる第2章は、『タブロー』において、フランスという空間が、第一段階から第四段階までどのように区分されているか、それぞれについて何ページの記述がなされているか、地方自治、魅力などに関して、いくつかの場所がどのように評価されているかということ量を計量化・地図化して分析したものである。北東に高く南西に低い勾配が、当然といえるかも知れないが指摘されている。Marie-Claire Robicによる第3章は「タブローにおける空間と時間」と題されて、20世紀初頭においてヴィダールが、いくつかの場所の景観に、どのような過去が刻印されているのを見たか、またそのような過去の刻印が当時の景観および未来とのあいだにつくりだす緊張関係をどのように見ていたかを体系的に検討したものである。環境条件を歴史的背景のなかで吟味するヴィダール地理学の本領が、『タブロー』の記述を具体的に引用しながら説得的にときあかされている。

1908年に、フランス史シリーズの一巻としてではなく『フランス。地理的タブロー』と題された独立の書物として、約250葉の写真と銅版画を新

たに加えた『タブロー新版』がおなじアシェット社から出版された。Didier Mendibilが執筆した第4章は、この1908年版の図版とキャプションについて、イコノグラフィの分析を試みたものである。E.ルクリュの『世界地誌』のフランスの巻 (1877年) の図版との比較もなされている (亡命生活のルクリュが、自分で図版を選んだかどうかはわからない) が、河川・滝・山岳などの自然景観がルクリュの本に多いのに対して、ヴィダール・ド・ラ・ブラーシュにあつては、人間の営みに焦点をあてたものが多く、キャプションには観察者を移動させて多角的にみた説明が多い。また自然景観に関しては、ヴィダールにあつては植生に関するものが多いことも指摘されている。Mendibilは、第6章でもヴィダールによる景観の説明を分析し、写真のキャプションにおいて、写真から視覚的には読みとれないことまでふくんだ文章が多いことを指摘している。Loiによる第5章は、『タブロー』における因果関係の説明を分析したものである。因果関係の説明は空間スケールによって異なるが、ヴィダールにあつて圧倒的に多いのはメソスケールの地域レベルでのものである。環境論的な説明のみでなく、交通路が重視され、その場合にはフランスという国家の空間構造への言及がなされる場合が多い。また因果関係の説明に、ヴィダールが「もし……がなかったとすれば」という仮定文をかなり使用していることも指摘されている。

Paule Petitierによる「ひとつの『タブロー』からもうひとつの『タブロー』へ」と題された第7章の主要なテーマは、ミシュレのものとヴィダール・ド・ラ・ブラーシュのものとの比較検討である。ミシュレにとってフランスは歴史的に形成された当然の統一体・全体であったのに対して、ヴィダールにとって『タブロー』は、他方では地理学の歴史学からの独立の主張だったのであり、地理が明日の歴史をつくるのだという主張をこめて『タブロー』における言説が展開されているのだという理解がなされている。つづく第8章はMarie-Vic Ozouf-Marignierによる『「タブロー」と地域区分』で、ここでの重要な指摘は、ヴィダールは伝統的ペイ概念を重視することによって近代的地域概念の発見者になったのであり、この移行にとって重要だったのは、東部の中心であり

また地域主義運動の拠点であったナンシーにおける経験であったし、『タブロー』はこの観点から位置づけられなければならないということである。

Robicによる第9章「ネイションの領域化」においては、『タブロー』が19世紀的政治地理学と歴史地理学とを克服することによって新しい人文地理学を樹立するという学問的企図であったのみでなく、それによってフランスを単なる政治的領域として描くのではなく、社会的・市民的領域として基礎づけることにより、「国家のタブロー／祖国のタブロー」という二重の性格をつつことになり、ナショナル・アイデンティティーの形成という実践的課題にこたえるものになったことが結論されている。具体的にヴィダールがフランスの個性をどのように提示したかを認識論的に吟味したが、Jean-Marc Besse による第10章で、ここでは、『タブロー』のみでなく『フランス東部』をもつらぬくヴィダールによるフランスの「統一性」と「調和」概念が検討され、彼がフランスを、経済的存在、政治的存在、歴史的存在としてよりも、すぐれて地理的存在として把握した根拠が、リッターにまでさかのぼる近代地理学の相観論 (physionomi) の文脈にあったことが説かれている。

RobicとOzouf-Marignierが執筆した第11章はむしろ第9章と関連するのであるが、出版後一世紀の間における『タブロー』のフランスおよび外国における受容の歴史がふりかえられているが、フランスにおけるその最初の受容が、ドレフィス事件を契機とするアイデンティティー危機と重なる

り、最近30年間における再吟味・再評価がヨーロッパ統合とグローバリゼーションの進展と重なることを指摘して、近代地理学のひとつの古典が、学説史上だけでなく、社会思想史・社会史的意義をもったことをあらためて教えてくれている。

大きな写真、地図、色刷りの絵画作品などの図版をふんだんに用い、詳細な側注を付した大版の本で、38ユーロという値段では考えられないような贅沢な造りの本になっている。共著であるため、執筆者ごとに論旨、方法に相異があるのは当然であり、また章の構成に工夫の余地があったのではないとも考えられるが、この研究グループは、CNRSに属する組織として長年共同研究を行い、多くの成果を発表してきていて、序章、結論、全体の文献目録と各章の記述との連関も見事に取られている。多くの新しい問題点を提起し知見をもたらしてくれた好著であるといえよう。

(竹内啓一)

〔注〕

1) このチームは2001年には、レンヌ大学関係者などとともに、Baudell, G., Ozouf-Marignier, M.-V. et Robic, M.-C. (sous la direction de) *Géographes en pratiques (1870-1945): Le terrain, le livre, l'actualité*. Rennes, Presses Universitaires de Rennesという題名だけからは何の本だか見当がつかない論文集を刊行したが、この本はE. de Martonneをはじめとするヴィダールの教え子の世代に属するフランス地理学の群像に焦点をあてたものである。